

安孫子昭二 博士学位請求論文

『縄文中期集落の景観』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論は、縄文時代中期の関東地方南西部における地域社会とその文化の成り立ちを、集落遺跡・土器様式・土偶の分析から総合的に研究したものである。中期後葉に、加曽利E式という斉一性の強い土器様式が関東地方全域に及ぶ広域的分布圏を形づくるなかで、多摩丘陵北部を中心とする地域には、「連弧文土器」という独特な土器様式が成立し、地域性が顕在化した。論者はこの考古学的事象に注目し、多摩地域における約200年間の集団の動向を通して、一つの地域社会・文化の形成と変容のありさまを克明に論述している。

第1章では、1965年頃から現在までの関東南西部における縄文時代中期の研究史を整理し、基礎分野となる土器型式編年研究の進展とともに集落や地域に関する議論が深められてきた過程を回顧する。そうした研究史とともに、論者の問題意識と研究構想が深化してきた過程を、自らが発掘調査した遺跡とそこでの経験的事実に触れながら説明し、本論の研究テーマを解題している。

第2章では、悉皆的な発掘調査がおこなわれてきた東京都多摩ニュータウン地域の中期の集落遺跡群の中から、5遺跡を抽出して、集落の構造・景観とその動態、遺跡の性格等を分析している。20年程度の短期間の集落跡であるNo.446遺跡の分析では、勝坂式期の環状集落を

構成する竪穴住居群を詳細に分析し、大小2棟からなる基礎的単位の存在と、3単位6棟ずつからなる2群が中央広場をはさんで対峙する規則的構造を明らかにする。また、南北2群の間で屋内炉の形態に対照的な差異がある事実を捉え、集団差を反映する象徴的区分と解して、双分制の社会組織を想定する。さらに住居数と床面積、縄文土器の容量などを根拠に、集落人口の復元を試みている。No.446B遺跡の分析では、6段階にわたる集落の時間的変遷を克明に追い、加曾利E2式土器と連弧文土器の組成比率が逆転する過程を捉え、集落が安定して継続するなかで製作される土器の型式が転換された様子を明らかにしている。No.9遺跡の分析では、100点以上の土偶や人面把手などの祭祀的遺物の多さに触れ、遺跡群のなかでの特異な性格を指摘する。No.939遺跡の分析では、竪穴住居・掘立柱建物・墓壇群からなる分節的単位の存在を明らかにするとともに、曾利式土器の組成比率の高さや土偶型式の特徴から、外来系の曾利式集団が集落内に居住していた可能性を指摘する。No.57遺跡の分析では、2棟1単位の住居が連弧文土器直後の12期から14期まで継続したことを明らかにしている。以上の分析を通じて、集落遺跡群の継続性、集落の移転・派生、集落ごとの性格の違い、集落内の社会組織などの諸相を解き明かし、地域社会としての景観を具体的に描き出している。

第3章では、中期後葉11期に発達した連弧文土器について、型式編年論・系統論・分布論の視点から徹底的な分析を加える。連弧文土器の出現と展開を明確にするために、関東南西部に分布する13箇所の拠点集落を厳選し、住居跡出土の一括遺物の土器組成を詳細に分析し

ている。土器群全体に占める連弧文土器の比率と文様モチーフの類型から4つの地域的様相を識別し、連弧文土器を主体的に生み出した中核的集団が、多摩丘陵北部・武蔵野台地南縁に存在した事実を突き止めている。そして、分布の中心にあたる多摩丘陵北部の地域的様相を詳細に検討し、連弧文土器の成立に、当該地域集団のエスニシティーが深く関係していたことを読み取る。中期後葉10期には、関東地方の東西で土器型式の特徴が明確に異なっていたが、11期になると加曽利E式のデザインが関東東部のそれとほとんど同化して地域性が不鮮明となる。日常的な調理・共食の器である深鉢形土器のデザインや型式は、集団表象としての性格をもつため、加曽利E2式への同化は、関東南西部の諸集団にとって地域社会としての伝統性やアイデンティティーをも揺るがす、好ましからざる事態であった。加曽利E2式を俄に廃し、その代わりに「連弧文土器」を盛行させた文化的・社会的背景を、論者はこのように解釈する。

第4章では、「背面人体文」と称する文様を共有する土偶を取り上げ、関連資料を集成して型式分類をおこない、中部高地に起源をもつ土偶文化の系譜を明らかにしている。そして、この分布圏の東端にあたる多摩丘陵北部・相模野北半では、中部地方に共通する有脚型よりも、膝を折り曲げた折衷型、板状のつくりの無脚型が圧倒的に多い事実を明確にし、この地域が土偶文化の様相でも際立った地域性を示している点に注目する。土偶の出現・変遷を詳細に検討し、連弧文土器が発達する中期後葉11期前半に有脚型・折衷型・無脚型の各形態が出現したこと、小形化・平板化しながら12a期に最も盛行したことを突

き止めている。論者はこうした土偶文化の受容と変容にも、集団的アイデンティティーの高揚に関連した動きを読み取り、土偶文化をもたない東関東集団との差異化を図るために、親縁な曾利式集団の保有する土偶文化を「勧請」したものと解釈する。さらに、加曽利E3式土器の勢力が席卷する12b期にこの種の土偶が衰退した要因について、東関東集団からの政治的・文化的干渉に併呑されたとも推論する。

第5章では、各章に示した見解と課題について、新たな資料・データを用いて検証をおこなっている。まず、地域集団と遺跡群の成り立ちに関して、多摩ニュータウン地域最大の環状集落であるNo.72遺跡を取り上げ、年代の変遷と集落規模を分析するとともに、近傍に位置するNo.446B遺跡・No.446遺跡との関係を検討し、拠点集落が中期中葉から中期末まで約900年間にわたり継続的に営まれる過程で、拠点の一時的移転や人口増加に伴う分派があったことを確認している。大栗川流域を領域とする地域集団が拠点集落を維持しつつ安定的に存続していたこと、連弧文土器が出現した中期後葉11期は人口増加による集落の分派が顕著な活力ある時期であったことを示し、固有の領域を保持する地域集団の存在を強調する。次に、中期後葉11期・12期の土器群の地域的様相とその変遷を入念に検証し、11期の前半と後半とで加曽利E2式と連弧文土器の組成比率が逆転する事実を再確認するとともに、各集落が安定的に継続するなかで土器型式の組成が急激に変化した様子を明らかにしている。また、関東南西部の土器組成の一角を占める中部高地系の曾利式土器について、型式の正確さや変形度を分析し、時間の経過とともに次第に変形度が増し、連弧文土器が廃れ

る12 a 期に加曾利 E 式と曾利式を折衷させた「新戸・原山型」が生起したこと、曾利式の影響力は12 b 期には弱まり加曾利 E 3 式土器に統合された事実を突き止めている。また、大量の土偶を保有していた町田市忠生 A 1 遺跡を取り上げて土偶文化の受容と変容について検証し、10期から12期後半まで曾利式土器の比率が高い時期に背面人体文土偶が発達した事実を確認し、この土偶が曾利系文化の受容のもとに生成されたとする自説の妥当性を論じている。これらの検証作業によって、連弧文集団が曾利式集団との密接な関係のなかで土器や土偶を受け入れ独自の地域文化に変換していたという見解を補強している。

論文審査の結果の要旨

本論は、縄文時代中期の関東地方南西部における地域社会・文化の形成過程を、集落遺跡群の動向、縄文土器の型式変遷、土偶文化の受容と変容などの詳細な分析を通して、丹念に解き明かしている。研究の基礎となる時間軸として、中期後葉を4期11細別する精密な土器型式編年を用い、分析対象となる考古資料の時間的推移を克明に解析するとともに、高精度化した放射性炭素年代測定と較正暦年代をも積極的に利用して、集落の居住期間や継続年代、住居建築の流れなどを具体的に検討している。現時点の先端的な編年研究を応用することにより、地域集団の歴史的動向や集落内の社会構成、延いては一時期の集落人口までをも克明に描き出すことに成功しており、膨大な考古資料・データを緻密な方法論によって駆使し、縄文中期の集落景観と地域社

会の復元をおこなった研究として高く評価される。

本論は縄文中期における地域社会・地域文化の成り立ちを丹念に記述したモノグラフといえるが、論者の考察は、縄文文化・社会の歴史的評価に止揚される、さらに高次の問題を浮き彫りにするものとなっている。

その一つは、縄文時代における社会集団と物質文化の関係性である。論者は、多摩丘陵一帯を核とする狭い地域に「連弧文土器」という土器様式が生み出され地域性を際立たせた現象について、加曽利E式土器を保有する関東東部の集団に対抗する主体意識の表れと捉え、集団的アイデンティティーと帰属意識の高揚に動機づけられた地域集団の自己顕示が背景にあるものと解釈した。連弧文土器の盛行とともに出現した「背面人体文」をもつ小形土偶についても、中部高地系の土偶文化をいわば「勧請」することにより、土偶文化をもたない関東東部の加曽利E式集団との差異化を図った、と見る。中期中葉には東日本一円で土器様式の地域性が顕著となり、各地の地域集団が競合するように、土器の機能性を超越した大形把手などの過剰なデザインを発達させたが、論者は、土器様式と社会集団とのそのような関係性が、土器様式が斉一化して一見地域性が解消したかに見える中期後葉にも、根強く継続していたことを明らかにした。曾利式と加曽利E式という東西の地域文化に挟まれた関東南西部の集団の動きからは、土器様式や土偶などの物質文化の生成あるいは選択に、地域集団の帰属意識やエスニシティー、集団表象といった社会心理学的な要因が強く作用していたことが読み取れるのである。世界の先史土器に類を見ない縄文

土器の造形的な多様性・過剰性は、そのような社会的因子によって生成されていた可能性が高いことを意味しており、小林達雄の一般理論「範型論」の妥当性を実証する重要な研究といえる。

本論はまた、集落と社会組織の成り立ちについても、従来の常識的な見方を再考させる、数々の興味深い事実を明らかにしている。20年程度のごく短期間に営まれた多摩ニュータウンNo.446遺跡の勝坂式期集落の分析では、炉の型式で象徴的に二分される南北2群の住居群と、各大群を構成する3支群の単位、そして各小群を構成する大小2棟からなる最小単位を抽出し、環状集落が重層的な分節的単位によって組織されていたことを明らかにした。大小2棟からなる最小単位は、隣接するNo.446B遺跡の加曽利E2式期の集落にも内在し、通時的に認められるこの単位を、論者は「家族」と推定する。No.939遺跡の加曽利E2式期集落の分析でも、竪穴住居・掘立柱建物・墓群を個別に保有する単位集団の存在を見出し、それらが集合して3支群2大群の集落を構成していたと解釈している。基礎的な社会単位としての家族とその自立性を強く示唆する考察といえる。論者はまた、竪穴住居の改築・建て替えの痕跡を詳細に調べ、住居の建築回数と広場に造営された墓壇の数がほぼ一致する関係を見出しており、住居の更新が家長格の人物の死去、代替わりを契機におこなわれた可能性があるとは指摘する。とすれば、家族の自立性はなおさら強いものであったと考えられる。論者の復元するこうした社会組織は、生産性の低い「原始共同体」として語られることの多かった従来の縄文社会像とはまったく異なり、自立性をもった家族単位と重層的な分節集団を包摂する、より複雑な

社会構造を描き出す内容となっている。

関東南西部の地域集団は、曾利式土器の要素を取り入れて連弧文土器や折衷型式の新戸・原山型土器を生成し、また曾利系土偶を受け入れ類似の小形土偶を生み出すなど、甲府盆地一帯を領域とする曾利式集団と密接な関係を有していた。論者の見解では、それは情報や製品の受容にとどまらず、多摩丘陵一帯の拠点集落には、在地の加曾利E系・連弧文集団とともに外来系の曾利式集団が共住していたとされる。しかも、曾利系集団に特有の住居型式は集落内の特定区域だけでなく各支群の中に混在している状態であるという。外来集団の存在を裏づけるより確実な根拠の提示が求められるが、縄文中期の地域社会が閉鎖的なものでなく、常に外部の情報やヒト・モノを受け入れて自己形成する開放性を有していたことを示唆しており、この点でも重要な問題提起となっている。

このように本論は、縄文中期における地域社会と文化の形成・変容の歴史的過程を、物質文化の全体的構造から考察したものである。縄文土器・土偶・集落という多次元の考古資料の情報を総合する、これほど体系的な地域研究は前例がない。また、土器型式細別編年に基づく時間軸の細密さも、集落の景観や遺跡群の動態、地域間関係を詳細に描き出す確かな土台となっている。本論で考察された問題の広がりから見ると『縄文中期集落の景観』という本書のタイトルはやや違和感があり、また既発表論文を並べたオムニバス式の章立てからは中心的なテーマが読み取りにくい印象を受けるが、縄文時代の地域社会・文化の実像を長年にわたって追究した完成度の高いモノグラフであり、

縄文時代の地域研究の到達点を示す優れた研究として高く評価される。

以上の審査結果から、本論文の提出者安孫子昭二は博士（歴史学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成24年3月9日

主査 國學院大學教授 谷 口 康 浩 ⑩

副査 國學院大學教授 吉 田 恵 二 ⑩

副査 日本大学教授 鈴 木 保 彦 ⑩

副査 早稲田大学教授 高 橋 龍三郎 ⑩